

## 「コラム」校庭一面のスケジュール帳

―時間を携帯するということ―

中村理恵子



ベルギー製百号キャンバスは、画学生だったころの私にとって年に数点制作する大作のための空間だった。独特な香りを放つラビットグルーのタフな皮膜と感触は、創作のスイッチを押す大事な装置の一部でもあった。

その大事なキャンバスはいま、ひと月の日数に合わせて三〇ないし三一のマス目が作られ、まっさらな巨大スケジュール帳として一ヶ月ごとにイーゼルに架かる。情報機器が小型軽量化していく世のケータイ・ブーム。私もそんなガジェットが大好きで、むかし買ったケータイなんかは、捨てないでちゃんとパッキングしているほどだ。その時代の空気まで一緒にパッキングして。小さなシステム手帳でいいじゃない。ケータイでスケジュール管理すればいいじゃない。そんな時代のささやきに逆行して、決して持ち運びに都合がいいとはいえない百号キャンバスにスケジュール帳を作るといふパラドックスは、どうして生じたのか。

なんでいまさらキャンバスよ。

なんでいまさら油絵の具よ。



一日分の枠がはちきれんばかりに情報があふれる手帳

スケジュールを書くという、誰でもやる行為の意味は？

毎年一〇月を過ぎる頃、豊富な文具をラインナップする東京・銀座の伊東屋は、日常の基本となるスケジュールを記すためになるべく使いやすい手帳を選びあぐねる人々であふれかえっている。店の巧妙な戦略もあって、手帳活用のカリスマお奨めの目新しい手帳などが平積みされている中を、大半の人が、目的の手帳だけを購入してさっさと立ち去ることができない。

私も去年とは違う手帳について浮気したくなるが、結局は一ヶ月分のスケジュールをすっきり見渡させる「一ヶ月ブロック式」といわれる文庫サイズの手帳を購入してしまう。そんな長年見慣れた手帳に、二〇〇一年七月以降ちょっとした変化が起こった。

今から思うとあまりに子どもじみた動機ではずかしいのだが、「一〇年に一度のラッキーな一年が始まります」という占いの小さな囲み記事にすっかり気をよくして、今日からの特別な日々をいままでのようなスケジュールやメモとして記すだけでは不十分だと考えるようになった。

一日分がわずかに切手大という小さな枠だけど、大事なものは、今この時をこのわずかな面積に存在させることだ。「×月×日、〇〇ちゃんとミーティング」と記すだけじゃなくて、ことばでは伝えきれない状況やラッキーな予感までをあますところなくとらえたい。そのためには、きつと描くほうが手っ取り早いと思った。タイミングよく手帳のポケットにびったり納まるコンパクトな色鉛筆セットも手に入った。超ミニサイズの色鉛筆で描きこむことは、少々の訓練が必要だったが、それにもすぐ慣れて、手帳には、濃密な毎日が並び始めた。

しかし数ヶ月もすると、切手大(2・5cm×2・5cm)の枠にどうしても納まりきれない日常があふれはじめた。仕方なく紙を足すことにする。しかしそれでも足りない。大きな紙片を、「飛び出す絵本」式に畳み込んでしる。ものの、まるで強力な掃除機のように日常を吸い込むので一ヶ月ブロック式手帳の視界が、あっという間に狭くなる。そんな日々の中で、ふと別室を占拠して長年ストックされている油絵用巻きキャンバスと木枠のことを思い出した。

そうだ！

こうして、手帳に積もる時間は、どんどん濃くどんどん大きくはみだして、ついには百号キャンバスへと拡張された。



京都旅行の始終を描くために手帳に継ぎ足された和紙



超ミニサイズの色鉛筆セット  
手帳・スケジュール絵全図

[http://www.renga.com/rieko/note\\_web/index.htm](http://www.renga.com/rieko/note_web/index.htm)

## 時間をカラーージュする

キャンバス上の一日は、二一cm四方の正方形になる。今日一日分の事物や時間のカラーージュが、二一cm×二一cm単位で増殖していく。たとえば、映画、コンサート、JRチケットの半券や散歩の途中拾った千円札の断片などは、実物をそのまま貼り込み、人や動物などの生ものやその場で揮発するものは、デジタルカメラで撮影するかイメージをクローキー感覚で描いてしまう。また、インターネットへのアクセスやデジタル環境との連携は、URLなどの文字列やコードをとりあえず記しておく。さらに秘密にしておきたいことは、QRコードに加工したり、一旦書いた上からわざとモザイクを描くなどして隠しておく。



テレピン油のにおい、絵の具のチューブをまたいで LAN ケーブルが床をほう

創作の支持体として、アーティストたちが繰り返す破壊と創造のせめぎ合いにびくともしない柔軟さを持っているキャンバスは、こんな質感の違うメディアウムやそれらの混在した作業をすんなりうけとめる。パブロ・ピカソは、絵具

以外のなんでもないもの、たとえば新聞紙や壁紙を独特なテクスチャーとしてカラージュしたり、ロバート・ラウシェンバーグは、拾ったものや映像などを、その意味を一旦剥奪してカラージュすることで彼のアートにしてしまった。しかし、私の場合は、こんな芸術表現を目的としたカラージュではない。一日の壁と余白を掬いとりキャンバスに定着させる。アートじゃないが日常業務でもない。時間をカラージュする営みに、バネと腰のあるこのタフな素材と百号の広さは本当にありがたい。なぜか作品でないにもかかわらず、予想以上に楽しい。



### キャンバスがあふれる

仕事部屋に百号キャンバスが二十数枚あふれる、さすがに息苦しい。そこで近所の廃校になった小学校の校庭に退避させてみることにした。二〇〇四年の盛夏、真南に面しているグラウンドは、日差しも強くてすごく暑い。ずいぶん無茶して重ねた絵具の層が溶けだすのではと少し不安になりながらも、さつそくキャンバスをべったり砂上に寝かせてみる。そして、部屋にみっちり詰まった時間を大きな空間でみることにわくわくしながら、急いで三階の教室に駆け上がって眺めていると、一年間一二枚分のキャンバスは、5m×5m四方になるのだが……妙に、ちっぽけだ。

絵画作品のように、全体に意識を這わせた緊張感のある構図とは違って、独特な余白ばかりが目立つ。地塗りの均質な白が太陽光線を跳ね返して、飛行機の窓から見る湖沼の水面を思わせる余白が、点々と鏡面のように硬く光る。

一日限りのこの異様なキャンバスの日干し行事を目撃する友人知人たちに混じって、ソフトボールに興じる親子や犬を連れて散歩に来た人々がキャンバスを遠巻きにする中で、真っ白なキャンバスに日々生えてくる時間が、まるで澄んだ沼に浮き沈む水草のようにゆらゆらと漂って茫々とまとまりなく発散しつづけるように見えた。



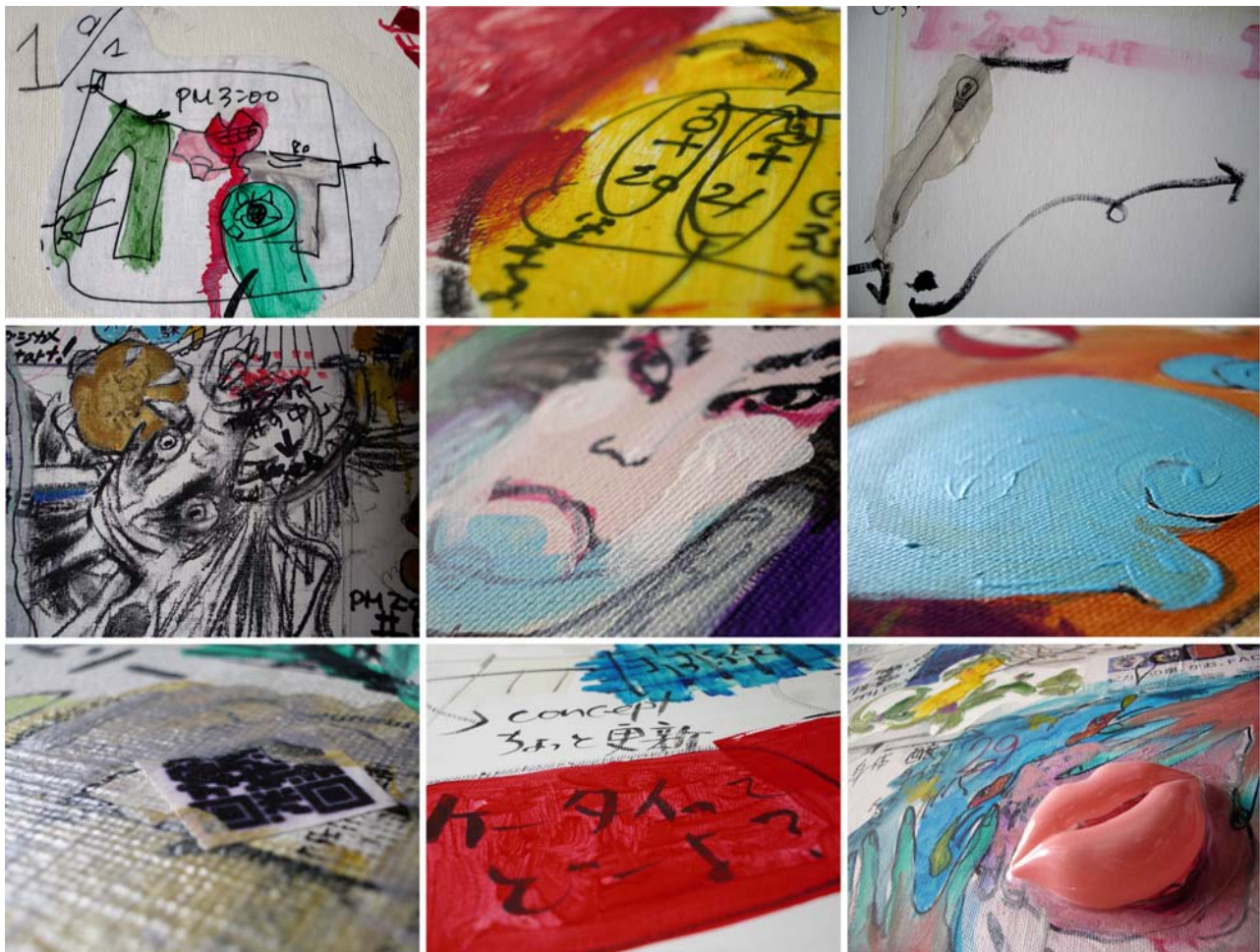
### 日常の濃度と深さを掬いとってみる

校庭上空からの鳥瞰図から、一気に急降下してぐっと画面に寄ってみる。まるで蟻が砂糖ポットからこぼれ落ちたわずかな砂糖粒に群れるような気持ちで、キャンパス上の曖昧な一日分のエッジを絵具の描線や紙片の連なりを探りながら小回りの効く高性能のデジカメで撮影してみる。すると、突如、日々の明確な刃境がみえてくる。

一日分のマス目には、その日の時間が堆積して物理的な厚みをもつと同時に、仮想的な空間の深さが見えてくる。時間の嵩と言ひ換えてもいいかもしれない。この空間のどこかに、過去と未来から必然的に引き寄せられた関連情報がリンクして月単位に広がるネットを編む。もちろん、「なにもなかった」か、あえて

廃校になった小学校の校庭に突然現れた奇妙なスケジュールと、遠巻き集う人々  
校庭へ『100号キャンパス・スケジュール画』

[http://renga.com/rieko/100F\\_ws/index.htm](http://renga.com/rieko/100F_ws/index.htm)



キャンバスに漂う日常のディーテル

「なにもしなかった」というどこにもリンクしない孤立した日は、ブランクとして現れる。逆にいつまでも意識を離れない大事件や印象深いイベントは、マスをいくつも突き抜けてキャンバス上にあふれる。

いずれにしても三〇ないしは三一のマス目には、それぞればらばらに流れる時間とストーリーがオンエアされ、どのマス目にも「生」の私が住んでいる。

このキャンバスには、「私の時間」の写像ではなく「私の時間」そのものがあるように思えてくる。



## ふたたびデジタル空間

キャンバスに密着した毎日を送っていると、ちょっと外出するたびに仕事場のキャンバスが気になってしょうがない。まるでブログやSNSへの反応が気になってケータイでチェックしたくなるように。そこで、キャンバスを見つめつつけるためにウェブカメラを設置して、すっぽり両手で包みこめるくらいの最新のスマートフォンを持ち歩いて百号のキャンバスをモニタリングしてみる。スマートフォンの液晶に表示されたキャンバスを最初に見たときの印象は、なんとといっても「濃い！ ぐんと日常が濃くなっている」ということだ。かつて持ち歩いた一ヶ月式ブロック式の手帳十色鉛筆とは明らかに違う。



キャンバスを凝視するネット接続されたウェブカメラ

電子的に表示されたキャンバスには、ずいぶん彫りの深いコントラストのある時間が流れている。この濃さは、単純に百号キャンバスへ拡張した分だけ広がった面積と情報の量に起因するのもかもしれない。あるいは、道具の力のようなものが作用したのか。たぶんばかばかしいくらい瑣末な日常なのだが、それをキャンバスに思う存分描く気持ちよさや、うっとりするようなセーブルの筆致、そして鮮やかな強い発色の絵具が、私を鼓舞したことは間違いない。

キャンバスを作品制作以外に使用するという非日常性を喩えると、それはまるでウエディングドレスを着て自治会費を集めるような、あるいはつつかかけに紙袋をさげてエジプト旅行に行くようなものだろうか。そこにこみ上げてくる

異様な緊張感が、日常の中にある経験や記憶の地形の複雑さとコントラストを十分に増幅させて、結果的に私の日常の解像度を飛躍的に高精細にしたように思う。



スマートフォンに表示された100号キャンバス

再び携帯できる手帳サイズに表示された私のスケジュールは、あたかも新たな縁を得たようにも見える。未だ絵具の乾ききらない新作を収めたような瑞々しい画面を、ついうっかりミニ色鉛筆のつもりでスタイラスペンを取りだしタップしたくなる。だが、液晶の皮膜を压した筆は、時間更新のコーラージュにはならずキャンバスの像を歪ませるだけで空しく戻ってきてしまう。

ますます回線スピードの増した仕事場に、モノとして在るキャンバスと、それを濃縮して表示する手中のデジタルなモバイル・キャンバス。一方が実体で片やそれを映しているだけという単純な構図以上の何かを感じる。しかしこれで終わりではなさそうだ。

私の時間を、次にどこへ逃がしていこう。

【関連URL】

中村エP『井の中の中村理恵子』

<http://rieko.jp/>

これは、『「ミユナルなケータイ」モバイルメディア社会を編みかえる』（水越伸編共著・岩波書店）より、中村著作部分「コラム」校庭一面のスケジュール帳「時間を携帯するということ」を抜粋し再構成してPDFにしました。